

# くものいと

第11号  
2-VII-1992  
関西クモ研究会  
大阪府茨木市

A T Y P U S 廃刊と「くものいと」

八木沼 健夫

A T Y P U S はもともと東亜蜘蛛学会関西支部の機関誌として出発したが、No. 6 以後は東亜蜘蛛学会に吸収され、学会の補助機関誌となった。クモの記事のほか、東亜蜘蛛学会の会員名簿、会計報告、本部からの連絡事項なども、当時 A C T A A R A C H N O L O G I C A の発行人であった高島春雄氏の指示により A T Y P U S にかかげ、A C T A を助けた。

本部発行の雑誌となっても誌名は A T Y P U S のままで、その趣旨と内容は初期の姿が受け継がれた。その後 A T Y P U S の内容が次第に変化し、高度化するとともに往時の面影は消えてきた。廃刊とともに多くの人々、とくに往時を知る人は過去を懐かしみ、A C T A に合流されても A T Y P U S の精神はそのなかに生かされるであろうとの希望的観測を持っておられる。

A T Y P U S の終刊号に寄せられた感想文もさまざまで、年令層をよく反映している。私は感激を以て読ませていただいた。感想文のなかには A T Y P U S とまったく関係のない記事もあったが、これらも参考としてありがたく拝読した。

A C T A は専門誌として発展していくであろうが、その反面きびしい審査もなく、誰もが気軽に投稿でき、短編であってもニュースや談話などが挙げられ、誰かどこかに読む記事のある楽しい雑誌が欲しいものである。

学問の進歩に伴い質的向上は望ましいが、会員すべてが専門家ではなく、むしろアマチュア的趣味を持つ人が多い。専門家でなくとも、このような雑誌が、将来専門家を生む温床となるのである。

こうなってくると、今のところ地方紙がその役目をしてくれることに望みをかける。H e p t h a t h e l a とその会報、K i s h i d a i a と東京蜘蛛談話会通信、蜘蛛、しのびぐも、とたてずぐも（A B C 順）などは上記の条件を満たしてくれている。

さて関西における活動はどうか。関西支部雑誌 A r a c h n o l o g i c a l N e w s も A C T A に吸収されるとともに、支部固有の機関誌を失った。支部とは名のみで、支部的性格はなくなり、時折研究会や採集会などの地方的活動のみをおこなってきた。

支部の雑誌がなくなって久しく、関西のメンバーによる会が要望され、会名も関西クモ研究会と変更し、1982年には機関誌が必要ということで、ニュースレター的なものとして、「くものいと」が生まれた。

他の誌と比べてもっともささやかなものであるが、印刷物は細々ながら10年生きてきた。この間は清水裕行氏の労に負うところ多く、会誌の編集・印刷・会

計をいっさい引き受けて下さったことに改めて感謝の意を表す。

しかし彼としても忙しい勤めの身、いつまでも一人に頼るにしのびず、数名の有志が発起して新しい歩み始めることとなった。昔のA T Y P U Sの姿に戻せないにしても、本部のある地元の会誌であるから、今後良いものに育てたいと思う。

私は今や会誌を云々する立場にはない。現在努力されている中堅層にいっさいおまかせしたい。すでに横綱もいれば大関もいる。私は幕下であったので引退しても親方になれないが、老兵ながらじっと成長を見守っていきたい。今後は一会員としてときどき雑文を書き、またみなさんの文を読むことを楽しみにしている。「くものいと」の益々の発展を祈る。

ハイテクの盲点をつく

吉 田 真

3月のある日、私は建設省福知山事務所の道路管理課に勤務するTさんらの訪問を受けた。クモに関する相談である。話を聞いてびっくりした。クモが自動車事故を起こした容疑者になっているのだ。Tさんの話は以下のようなものであった。

昨年12月16日の晩から17日の朝にかけて、京都府北部の舞鶴市の国道でスリップ事故が起こった。道路の凍結によるものである。詳しく調べてみると、道路に水を撒くスプリンクラーの誤動作があったことが分かった。

この地方は雪が多く、スリップ事故を防ぐために降雪時にスプリンクラーが自動的に作動して水を撒き、路面の雪を溶かすことにしている。ところが、雪も降っておらず比較的暖かかった16日の午後から夕方にかけてスプリンクラーが作動し、その後停止したために夜中から翌朝にかけて撒いた水が凍結し、事故が起こったのである。

スプリンクラーは自動降雪探知機と連動している。空から降ってくる雪片による赤外線ビームの遮断が何度か起こると、探知機は雪が降っていると判断し、スプリンクラーを作動させる。この探知機は、雨粒と雪片の違いをビームの透過率などから区別するらしい。

私のような素人からみても、非常に良くできた機械である。では、問題はどこにあったのか？それは、探知機に内蔵されているヒーターである。探知機の外側に温度センサーがあって、気温が摂氏7度以下になるとヒーターが作動して探知機を暖める。

ヒーターは、探知機の屋根につもった雪を溶かすためのものである。この雪をそのままにしておくと、やがて屋根からはみ出して垂れ下がり、ビームを遮断する恐れがあるからだ。

さて、探知機はなぜ間違っただのか？それはなんと、探知機の内部に入り込んだクモがビームを遮断したかららしいのだ。探知機のなかから体長4-5ミリのクモが一匹採集され、クモが張ったと思われる「まゆ」が2つ、確認された。

東京の松本誠治さんに見ていただいて、このクモはネコハエトリであることが分かった。たぶん、越冬するために入り込んだもので、ヒーターで暖められたので「まゆ」から出てきたのであろう。赤外線ビームは熱線であるから、体を暖めるためにビームを遮断したのかもしれない。

これを防ぐ一番良い方法は、クモに侵入されないようにすることである。侵入ルートは2つある。ひとつはスプリンクラーと探知機を結ぶケーブルを通す穴の隙間であり、これはテープなどで遮蔽できる。

もうひとつはビームを通す穴であり、これがやっかいである。この穴をガラスなどで遮蔽すると、ガラスが曇ったりビームの透過率が低下したりする。遮蔽しなければ、またクモが侵入することになる。

このように、人間が直接手を下さない自動装置というものには、思わぬ盲点があるものだ。依然、うちの息子の小学校の校長がこぼしていたことがある。昔と違って、今は用務員さんも夕方には帰宅してしまい、学校は無入となる。

夜中に自動警報装置が鳴り響くと、まず警備会社のベルがなり、校長が呼び出される羽目になる。かわいそうに、最近2件あったとか。原因はなんと、アサガオ。成長した葉が赤外線ビームを遮断したらしい。

Agelenopsis aperta って何ですか？

こんな問い合わせが新潟大学の女子学生からきていると八木沼先生にお聞きして、「女の子には優しく」をモットーとする私は、「それは僕の方で」と引き取った。

彼女は新潟大学脳研究所神経化学部門で卒業研究をしていた片桐貴子さんで、この春から大学院生であるという。この研究室ではさまざまな動物の毒の成分を分析しており、アメリカのSpider Pharon社から *A. aperta* の毒を購入している。毒はこのクモの牙から出させたものだという。

このクモの生態は、箱根で開かれたクモ学会にも出席したテネシー大学のライカート女史とその一派によってかなりアクティブに研究されており、数学を駆使した難解な論文が幾つも書かれている。とりあえずこれらの論文とアメリカの図鑑のコピー、クロゴケグモ・シドニージョウゴグモなどの有毒グモの文献などを彼女に送った。

その後彼女と電話で話したところによると、クロゴケグモの毒の分析もやっただらしい。このような研究が日本でもなされていることを知って、たいへんうれしかった。しっかり研究して、クモ学会でも発表して欲しい。

(吉田 真)

## 茶園のクモ余話

### 第4話 クモ相の変遷(Ⅰ)

寺田孝重

関西クモ研究会の「くものいと」が発刊された時に、茶園における天敵としてのクモ類研究を行っていた筆者は、茶園で見聞したクモの動きのなかで、学会報告などにはなじみにくい話題を提供するつもりで「茶園のクモ類余話」を投稿しました。

その後、筆者は茶業の研究職場から離れ、専門分野も花卉園芸に移り、しかも農業大学校という実業教育が職務になりましたので、「茶園のクモたち」があまり頭に浮かんでこなくなって、月日だけが過ぎてしまいました。とくに90年には「花の万博」が開催された関係から、89-90年は忙しい思いの毎日でした。

しかし、「茶園のクモ余話」も第3話で中途切れではなんだか「3号雑誌」のようで、本人としてはあまり気分の良いものではありませんので、せめて5話完結くらいまでは書きたいと思い、筆を取り直しました。今回の話題は、相の変遷(サクセッション)ということです。

第1-3話でも取り上げていますが、茶園のクモ社会を構成する住人に、おもしろい片寄りがみられます。その例が「ユウレイグモ」であり「クリチャササグモ」であるのですが、このような片寄りがどんな風にできあがってゆくのか、興味深いテーマではあります。しかし、なかなか難しく実証的には手が付けられませんでしたので、この場で想像論を展開してみたいと思います。

でも、なんの根拠もなしに想像だけするものではありません。実は農業大学校へ84年4月に転勤したとき、学校に茶園の造成が準備されており、85年1月には新地が造成され、4月に茶園が新植されました。それまで、学校近辺も含め茶園という環境がまったくなかった場所に茶園が生まれたわけです。

これは、茶園の住民調査の願ってもないチャンスでした。さっそく花卉園芸コースの学生たちを動員して、クモの調査を実施しました。他のコースの学生も、「花の先生がなんでクモなんかを採集してるんや」とのぞきにきたり、手伝わされた連中はおもしろがったり、気味悪がったりで、こちらの方もいろいろな反応をみせました。

さて、奈良の不退寺近くにある農水省の奈良茶原種農場と宇治の京都府立茶業研究所から分与してもらった茶の苗には、見たところコハナグモしかいませんでした。植え付けて剪定した時点では、クモの住民はまったくいないようにみえました。そして、雑草抑制と乾燥防止などのために稲ワラを敷き詰めた畑の表面では、コモリグモ類が走り回っていました。

## 1. 世界のクモの種数ほか

最近入手した J. A. Coddington & H. W. Levi 共著論文 "Systematics and Evolution of Spiders" (Annu. Rev. Ecol. Syst. 1991. 22:565-592) に世界のクモの種数が記されているのでその一部を紹介する。何かを書くときや、話すときの参考にしていただければ幸いである。

世界のクモは 1988 年までに 395 科 3000 属 34,000 種が記録されている。このうちおもなものは次のようになっている。

ハエトリグモ科	490 属	4,400 種
サラグモ科	400 属	3,700 種
コガネグモ科	160 属	2,600 種
ヒメグモ科	50 属	2,200 種
コモリグモ科	100 属	2,200 種
ワシグモ科	140 属	2,200 種
カニグモ属	160 属	2,000 種
古・原蛛類	15 科 260 属	2,200 種

上記 34,000 種は記載された種の数で、これは現存種数の 1/5 と推定され、全種が記載されれば、世界のクモの種数は 170,000 種になるだろうという。

地域別のクモの数：比較的是っきり分かっている地域のみ。

日本	1100 種	イギリス	600 種
北米	4000 種	ドイツ (ベルリン地区)	500 種
オーストラリア	9000 種	ニュージーランド	700 種

クモ学会・クモ学者 (1989)

世界のクモ学会数 24、発行雑誌 8 種  
CIDA 加盟者数 750 名 (うち日本 39 名)

上記 Coddington & Levi の論文には科より上のランクに関する系統的な問題が論じられており、旧体系信奉者にも新体系推進者にもいろんな意味で参考になる点が多く、分類学に携わる人の必読に値する論文であると思う。

私も旧人類ながら目下勉強中である。いずれどなたか、詳しく紹介解説して下さいことを期待している。

## 2. 中国のクモの文献 (分類)

これまで「ATYPUS」につづいて「くものいと」に、中国で発表されたク

モを連続紹介してきたが、最近是中国のクモ学の発展にともない発表数が激増し、本誌上では収容しきれなくなっているため、今後は全部の逐次紹介をやめ、おもなもののみにとどめる。

それぞれ専門分野の方は希望の科をお知らせ下されば、それに関連した文献の入手時に連絡申し上げることにする。今回はさしあたってもっとも新しく入手した文献を紹介する（簡体字は旧漢字に直す）。

劉少初・王家福・彭賢錦, 1991. 我国蜘蛛兩種. (オウギグモ・ハエトリグモ). 湖南大, 自然科学報, 14(4):362-364.

王家福, 1991. 我国南方巨蟹蛛科蜘蛛兩新種和三簡單性的描述. (アシダカグモ. 四川動物, 10(1):3-6.

梁鉄・王家福, 1991. 新疆擬態蛛属蜘蛛一新種. (センショウグモ). 八一農学院報, 14(1):61-62.

謝莉萍・尹長民, 1990. 中国合跳蛛属(Synagelides)二新種及三新記録種. 動分学報, 5(3):298-304.

謝莉萍・尹長民, 1991. 中国合跳蛛科二新種(ハエトリ). 動分学報, 16(1):30-34.

彭賢錦・尹長民, 1991. 中国金希蛛属五新種(ハエトリ). 動分学報, 16(1):35-47.

肖小芹・尹長民, 1991. 中国跳蛛科兩新種記述. (ハエトリ). 動文学報, 16(1):48-53.

王家福, 1991. 中国南方肖蛸科蜘蛛的研究(アシナガ). 動分学報, 16(2):153-162.

王家福, 1991. 中国漏斗蛛属蜘蛛六新種. (タナグモ科). 動分学報, 16(4):407-416.

### 3. ロシアのクモの文献(日本に近い地方)

Marusik, Yu. M. & D. V. Lognov, 1991. Spiders of the superfamily Amaurobioidea from Sakhalin and Kurily Island.

Marusik, Yu. M., 1991. Crab spiders of the family Philodromidae from East Siberia.

Zuzin, A. A. & Yu. M. Marusik, 1989. a new species of spider of the genus *Pardosa* C. L. Koch from Magadan Province.

Oliger, I. L., 1991. The new spider *Araneus* of the *diadematus* group (Araneidae) from the Primorji. (イシサワオニグモのように思われる).

最近東シベリア・サハリン・千島のクモの報文が目立ってきた。日本との共通種も含まれており、参考になるものが多い。

### 4. キシノウエトタテグモふたたび大阪で

1977年と1978年にキシノウエトタテグモの雄が、拙宅と隣家の部屋のなかで1頭ずつとれて以来、久しく姿を見なかったが、今度はメスの大きいのが

見つかった。

やはり針中野の自宅の部屋のなかである。時は1992年5月31日。採集者は孫の Jesse Y. Yaginuma (6才)。雄は徘徊することはあるが、大きいメスが座敷でとれようとは。

どんなルートで来たか分からない。最近人の出入りが多いので誰かの体に付いてきたのかもしれない。クモは弱っていて文字どおり虫の息であったが、やがて動かなくなった。元気であれば飼育するのだが、やむなくアルコール葬にした。多産地では珍しくないが、大阪ではビックニュースである。

#### 5. 訃報 中国の王家福先生他界される

中国湖南師範大学副教授王家福 (Wang Jia-fu) 氏が1991年10月に他界されたことを、本年6月1日受領の同大学の尹長民教授のお手紙で知った。

王先生は尹長民教授のもとで長年研鑽を積まれ、中国でクモ分類学の第一線で活躍され、多くの業績がある。今回紹介した最近の中国の文献にも王先生の記事が4編ある。日本でも文通している人が何人かあると思う。私が中国長沙を訪れたときにもいろいろお世話になり、たえず論文をいただいていた。

これからという時に先生を失ったことは、中国にとってもクモ学会にとっても残念なことである。ここにご生前の業績をたたえ、謹んで哀悼の意を表します。

#### 6. 最近入手した日本のクモの重要文献 (ACTA, ATYPUSを除く)

1) 富樫一次、1991. 春日大社ナギ林のクモ相と昆虫相. 日本生物地理学会会報, 46:103-105. クモ9種、昆虫14種.

2) 徳本洋、1992. タンポポとジョロウグモから見た都市の自然. 自然と人 (19): 31-35. クモの著しい減少を嘆く. この記事に関しては朝日新聞 (5月24日付) 朝刊第一面にジョロウグモのカラー写真入りで出ている。

3) 小野展嗣・保田信紀、1992. 北海道産カニグモ科クモ類の採集記録. 層雲峡博物館研究報告、(12): 1-13. 北海道産のカニグモの記録であるが、単なるリストでなく、学名や和名が吟味検討されており、大いに参考となる。日本のクモ目録のカニグモ科で変更追加がある。

### 1) 恋のシグナル

6月はオオシロカネグモの恋の季節である。このクモとは長年付き合っている私は、メスの網にオスが侵入して交尾にいたる過程を何度も目撃している。オスはまず、メスの網の端で糸を引きシグナルを送る。その気のないメスは、網をゆすってオスを追い払う。

その気がある場合には、メスはあまり網をゆすったりしない。脈ありとみたオスは、糸を引く動作を繰り返しながらコシキにいるメスに近づいていく。コシキに到達すると、オス・メスともに第一・二脚を離し、第三・四脚でブランと網からぶら下がり、やがて交尾にいたる。

オスがきていることを、どのようなシグナルによってメスが認知するのか。メスはその気になったことを、オスはどこで判断しているのか。その辺の詳細は私には分からない。

目はほとんど役に立っていないはずだから、たぶん振動によるのだろう。ヨーロッパで開発されているクモの振動を記録する機械でも使って、分析してみたらわかるだろう。しかし、他の造網性のクモの場合とあまり変わりはあるまい。というわけで、私はいままで詳しく調べることもしなかった。

### 2) 意外な発見

しかし先日、私の調査地である京都市左京区の静原で、私は意外なものをみた。脱皮直後と思われるメスのそばにオスがいるのだ！メスは脱皮殻からぶらさがっている。やがてオスはメスに近づいて交尾した。

それから数日後、大文字山の溪流で同じような交尾を目撃した。こうしてみると、例外とはとても言えまい。きちんと調査すれば、かなりの頻度でこのタイプの交尾がなされているかもしれない。

脱皮は網の外でなされ、メスは脱皮中あまり動かないから、振動によってオスがメスを探知したとは考えにくい。たぶんメスの出す性フェロモンを探知するのだろう。

### 3) 危険の回避？

このようなタイプの交尾は、オスにとってどんな意味があるのだろうか。まず考えられるのは、交尾の際のリスクの回避である。脱皮直後のメスの体は柔らかく、交尾後にオスを食べることなどできそうにもない。

これに対して、メスの網への侵入は危険かもしれない。網はメスの狩猟の場所であり、侵入に際してオスは、自分が餌でないことを示してメスの攻撃衝動を抑えなければならない。これに失敗すると大変である。

飼育下では、オオシロカネグモのオスはしばしばメスに食べられる。野外ではみたことがないが、ちゃんと調べてみればひょっとするとかなり食われているかもしれない。もしそうなら、脱皮直後の交尾はオスにとって望ましいということになるだろう。



5月17日(日)茨木市の安威川上流の車作へ5名のメンバーで行ってきました。5月晴れという言葉がぴったりの暖かいさわやかな日で、私たちは9時35分発の阪急バスで一路現地をめざして出発しました。バスの中はボーイスカウトの子供たちでいっぱい、一列になって手すりを持っている私たちを乗せたバスは、新緑の樹々でおおわれたつづら折りになった山道を左右に車体を傾けながらゆっくりと進んで行きました。

到着したところは茨木の駅前からは想像もつかないぐらいの山の中、まずは緑の香りのする空気で深呼吸!!午前中は川の中に入り、洞窟性のクモでもあるヨリメグモを採集しました。午後は安威川の調査のためお昼頃移動。

途中金野さんのジープを発見。でも本人はいない!!あたりをキョロキョロと探してみたけれどやっぱり見つからない。というわけで置き手紙を残して先に進むことにしました。

さらに歩いていくと、今度はマムシをカバ焼きのウナギのように串刺しにした年配の男性に会いました。昔、といってもさほど前の話ではないけれど、田舎では田んぼの中でマムシをみると一升瓶の中へつかまえていたことを思い出し、今でも、しかもこのような都市に近いところでマムシを軽々と(ヘビをみたらすべて毒ヘビだと思い警戒している私からみれば)扱える人の存在に驚きました。その男性は、このマムシは先ほどこの近くでとったこと、また出る可能性もあるので、十分注意するようにと行って去って行きました。

橋をわたる前には、コガネグモをベッコウバチがおそっている場面に出会いました。シャッターチャンスだと言われましたが、カメラの準備に手間取っているうちにベッコウバチが離れてしまいました。

とはいえ、せっかくのチャンスにこれを逃すのは惜しいと、狭い道での車の通過にもめげず待っていると、再びチャンス到来。結局写真は撮れたけれど、焦ったためか被写体を小さく撮り、絞りが浅かったためピンとも甘く、精彩に欠ける写真になりました。

マムシの出現に十分気をつけながら、橋を渡り対岸で食事。昼食後は和歌山からこられていた東條さんに植物の名前を教えてくださいながらクモの採集。ノビルという植物の根が食べられるということで、イモ掘りならぬノビル掘りにチャレンジ。

スコップで掘っていただいたり、力任せに引っ張ったり、根のまわりに石がいっぱいあったので苦労して5、6本取りました。ニオイはネギそっくり。帰ってから夕食のメニューにと思ったけれど、ついうっかり忘れてしまい腐らすことに。というわけで今回、この話を載せたかったのですが残念ながら……。次回こそ何か食べれる植物に挑戦したいですね。そのときは料理方法も含めて教えてくださいたいので、合宿できるところがいいですね。

最後、帰りのバスに乗る直前に金野さんに会い、6人で記念写真を撮りました。

この一日の調査で、この村が気に入りました。とても楽しい、有意義な一日でした。

#### 会費納入のお願い

関西クモ研究会の会費は、年間1,000円です。今年度分をまだ納入しておられない方は、以下のところに振り込んで下さい：

郵便振替 大阪7-127257 関西クモ研究会

#### 今後の行事予定

- 1) 和歌山での合宿(採集会)：7/11～12
- 2) 秋の採集会：9/27
- 3) 研究発表会：11/29

#### 「くものいと」第10号の訂正

以下のような間違いがありました。申し訳ありません。

- 1) 3ページ9行目、17行目、4ページ17行目の~~虞~~は、~~虞~~の間違いです。
- 2) 9ページ2行目。「現在残っている」は「残っていない」の間違いです。

くものいと第11号

1992年7月2日印刷・発行

発行者 西川喜朗

編集者 吉田 真

発行所 〒567 大阪府茨木市

西安威-1-15

追手門大学生物研究室